

フランシス・ピカビアの「透明の時代」

—イメージの源泉について—

竹花藍子（大阪大学）

フランシス・ピカビアは1927年頃から1932年頃までの間に、輪郭線だけで描かれたモチーフを複数重ね合わせる手法を用いて絵画を制作した。これらは何枚もの透明なレイヤーを重ねているように見えることから、彼の画業においてこの時期は「透明の時代」と呼ばれている。発表者は、この時代の作品に描かれたモチーフがどのようなイメージソースから借用されたかを調査し、多くのモチーフがナポリ国立考古博物館の所蔵品カタログの図版と酷似していることをつきとめた。

ピカビアが作品制作にあたって様々な出版物からイメージを借用していたことは、すでに先行研究で指摘されている。ダダイズムに傾倒していた「機械の時代」には工業用カタログなどから機械のモチーフを借用していたし、第二次世界大戦前後の「具象の時代」の作品に見られる女性像は、ポルノ雑誌の写真がイメージソースであった。これらの時代の作品については、作中モチーフの源泉となった出版物が特定されている。しかしその一方で、「透明の時代」の作品に関しては、モチーフがルネサンス期の絵画やギリシャ彫刻からとられていることが明らかにされているものの、ほとんどは具体的な出版物の特定にまでは至っていない。ウィルソンが *The Principal Monuments of National Museum of Naples* (1875) に類似した図版が見られることを指摘しているが、言及するにとどめ図版は示していない。

ナポリ国立考古博物館の所蔵作品をもとにしたモチーフが多いこと、画家の息子ロレンツォの証言からピカビアが美術書を多数所持していたことはすでにわかっている。そこで、19世紀末から1930年までの間に出版されたナポリ国立考古博物館のカタログ29冊を調査したところ、作中モチーフと一致する図版を新たに13点発見することができた。これまでに類似が指摘されていた所蔵作品11点についても、図版がモチーフと酷似していることが確認できた。つまり、ピカビアはナポリ国立考古博物館のカタログから、少なくとも24点もの図版を借用していたことになる。これほど多くの酷似した図版が見つかったことから、画家が作品制作の際にこれらのカタログを用いていたことは、ほぼ確実であると言えるだろう。当時、ピカビアは考古学や芸術に関する書籍を収集していたコレクター、ジャック・ドゥーセと交流があったため、彼との交友関係を通じてこれらのカタログを手に入れていた可能性は十分に考えられる。

以上の新知見と、ピカビアの発言やエッセイをもとに、依然不明な点の多い「透明の時代」の制作プロセスを明らかにしていきたい。